

源綱紀氏改良新法

日本傍晚筆記學會大阪支會
會長丸岡平次郎著

ことば乃 寫真法

一名筆記學楷梯

大阪森玉林堂藏版





めいふふ
こふふふ
ふふふ
おれぬ

みよ乃すがこ
なるみ

大漢義字序玉結



第一 生徒を翻館とせしむるは、

第二 文章通しに翻譯するの目的

第三
宣樂通乎小
和諒乎功用

第一の筆記帳の謄文ハ之を緊通りにして上掲け、今

源
網
紀
演
述

橋人畧次譜卷記

凡例

一言語の寫眞法ハ日本語を寫し取るの法なれども之ハ熟達せば外國の語と雖ども寫し取るゝを得べく且つ之を綴るや横文の如く左よりするハ多年の經驗ハ於て實際便宜なるを以てなり

一此寫眞法ハ用ふる運筆の方法ハ筆の先より一寸許り上の方右のかみひしとほろひちをかき拇食中の三指の間に緩く持ち机上に於て寫し取るゝたハ紙

二
を右小斜め_レに置た右の腕を据え此三指の
みを働か_レて決_レて圈腕直筆などの古風に
依る可_レらるべし

一此寫真法に用ふる筆ハ米國ファブル製第
三號の鉛筆を良とそれどもデキソン社製
S_{エス}M_{エム}の鉛筆等の眞の丸形にて成るべくだ
け細く_レて且つ餘り硬くなく柔くなきも
のを撰ぶを可_レとそ又毛筆などは實際上極
めて不便なれば用ふべからず

一此寫真法に用ふる紙ハ西洋紙の眞質の強
きものを撰むか或ハ駿河半紙の成るべく
厚きものを_レ用ふるも可_レなり

一此法を學ぶ初の間ハ曲尺二分位の縦横罫
紙碁盤罫へ習字するを可_レとそ初學の間ハ
字体を能く習練せざれば實地筆記上ハ大
の困難あるものなり

一此寫真法に依る實地の寫取りを望むもの
ハ成るだけ左の方より光線を受る様_ニに注

意して坐をトむべし夜間などは殊ふ然り
 演者の發音も亦左より聞き取る様ふ着席
 するを可とす

編者誌

言語の寫眞法目次

第一章

總論

第二章

記號の組織及詳解

第三章

記號の綴り方

第四章

長く呼ぶ音の書き方

第五章

及て呼ぶ音の書き方

第六章

詰て呼ぶ音の書き方

第七章

疊て呼ぶ音の書き方及び用ひ方

第八章

詞尾の略記

第九章

語格の略記（一ふてふをは）

第十章

數字の略記

第十一章

略語

第十二章

略文記號

第十三章

加點法（語格及勸詞）

第十四章

節譜

第十五章

句讀法

第十六章

感詞の標

第十七章

記號連綴の例

目次終

言語の寫眞法

丸山平次郎 著

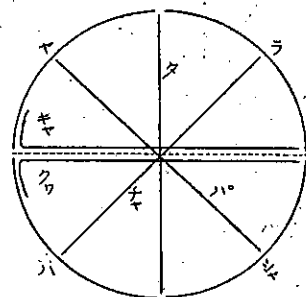
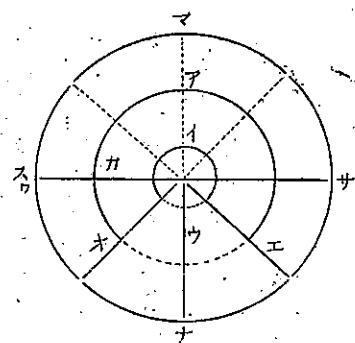
第一章

總論

言語の寫眞法の簡單にして且つ明瞭なる一種の文字即ち音假ふ基きて造るなる記號を連綴し及其他ふ略語略文加點等種々の方法に依りて人の言語を耳に聞かまふ詳細同時に寫眞するの學術なり

此法に用ふる記號は僅う平らと真直ぐと斜めとの都合十二箇の線の濃き淡きふ依りて其音種を分つものなり而して單なる記號を以て一言語を為し之を略語と

日本傍聴筆記法記號起因表



記號原形ハ圖の如く圓をハツとせしものよと成立つ

アハ原形中間の圓を象る
 イハ原形の中真を象る
 ウハ中經の半畫とを
 エハ斜傾の右半畫とを
 オハ斜傾の左半畫とを

其他の記號中濁音の文字ハ總て其清音の文字を濃く書くを規とせれども亦數種の變例あり即ち
 (一) 等の各行之なと又文字の頭を點の如く結びたるハ複音のみあるものふし
 (二) 即ち
 (三) 等の行之なり
 (四) 行ハ行の濃く書せしものあり
 (五) 及び各行等の文字ハ曲角ハ圓を附け其字尾を
 (六) 行ハ上の方
 (七) 行ハ下の方
 (八) 漸次ハ書を尚くとし
 (九) 記號表ハ就て參照せべし

(五) (四) (三)

此の如くカ行以下の各行も此例に異るともし然きどもまゝ結び合せる記號中同角度となるものあり然るとハ母字なるウエオの角を全く反對の角度とふも即ち
 (一) 例ハバコ
 (二) 例ハ
 (三) 例ハ
 (四) 例ハ
 (五) 例ハ

之なり又複記號を
 (一) 例ハ
 (二) 例ハ
 (三) 例ハ
 (四) 例ハ
 (五) 例ハ

の如く其母字を結合せの所まで内へ引き返して綴字上の便宜に依きり

母字とハアイウエオの五字を云ふ又母音とも云ふ

子字とハ二百五字の中アイウエオの五字を除きたる二百字を云ふ又之を子音とも云ふ

今前節に説きたる記號の組織を確むる爲に左の記號起因の原形を示す

(七)

記號表中ふラリルの三字を六十度の斜線を以て
右の方に書せしもの^ハ之ハ便宜上より造るし
ものふし通常のラリルを用ひるも礙がふし然
れども^モ及^ハ行と誤まるる^ハ之とされども此等
を行ハ四十五度の角なれば全く其角度を異ふを
宜しく誤認せざるやう注意を^レ口^ノの二字ハ
此例に依る能えざるものとす
寫真法に用ふる記號表を左に掲ぐ

此記號表中第一表の文字ハ我國の語を筆記
するに用ひ第二表の文字ハ重ムに外國の音
ふのみなるものふれば殊ふ表を別つて初學
の便ふ供也

日本傍聽筆記學記號表

第一表					第二表				
單音					單音				
ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト
ダ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	カ	キ	ク	ケ	コ
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	バ	ビ	ブ	ベ	ボ
パ	ピ	プ	ペ	ポ	マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ	ヰ
複音					複音				
カ	キ	ク	ケ	コ	カ	キ	ク	ケ	コ
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
サ	シ	ス	セ	ソ	サ	シ	ス	セ	ソ
ダ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ダ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
タ	チ	ツ	テ	ト	タ	チ	ツ	テ	ト
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	バ	ビ	ブ	ベ	ボ
マ	ミ	ム	メ	モ	マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ	ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ	ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ

此記號表中第一表の文字ハ我國の語を筆記
するに用ひ第二表の文字ハ重なり外國の音
ふのみなるものふれば殊ふ表を別つゝ初學
の便ふ供也

筆記學的の文字の發音を大別して單音、複音の二とふと

(記歸表中單複の音を兩表ふ別つと雖ども其組たてゝ更ふ異るゝとな)

(一) 單音とハ記號表中第一表のアイウエオヤヱヰ

于エヲ及び第二表のンギンギ台よミルルルルル
に至るの總數九十五音を云ふ

(二) 複音とハ記號表中第一表のキキキキキキよりリリ

リ、及び第二表の漢字より、
に至るの總數百十音を云ふ

單複の音種を細別して清音濁音清拗音濁拗音半濁音半濁拗音の六種と爲す

(一) 清音とハ ア カ サ タ ナ ハ マ ヤ ヲ

第四章 長く呼ぶ音の書け方

長く呼ぶ音とハ例ヘバク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、等の如く其發音の延長ふるを云ふ例ヘバ左の例の如く英雄、刑法等ハ則ち長呼ふて其字の母字を長大ふ書くを一般の規定とも單記號中(カ)行以下のア經の音ハ其字尾ヘ(ウ)の母字を附して長音となし又母字中「イ」「ウ」の三字ハ頭ふ長点(一)の符を附して長音となし「エ」「オ」ハ(下王「イ」「オ」)斯の如く通常の記號ハ一畫を加へて長音となし總て我邦の言語に「ハ」「ア」「イ」の二經の文字ふハ長呼なれども外國の音ふハ多くなるものあり(複記號中「イ」經の母音ハ長大ふ書くこと能わざれば「ア」「イ」「ウ」を長音ふ書くるの例は依る尚例題ふ就て見るぞ)

長呼の例

イ ア	ハ イ	一 ウ	ト エ	イ オ
英雄	刑法	歐米	帝王	
朝廷	報國	大阪	高名	
發明	流行	傍聴	教育	
統領	經濟	奏樂	幸福	

此寫眞法ふ依りて書き取ると、其ハ發音を聞くがまふ記号ハ勿論なれば從來の假字づかひふ依らば書をべし例ヘバ重賞と書くふ假字づかひふて「テ」「ヨ」「シ」「ウ」と書くも此法ふ據れば「ア」即ち「エ」と「ウ」の二字を長呼の例ふ書を

る之なり長呼の外反音詰音等も假字づかいに據らば聞
くが終ふ書るるハ長呼ふ異るとなり然れども何れも之
を反文をるふ當つてハ凡て我邦従来の假字づかいに依
るものと云

第五章 反て呼ぶ音の書き方

反て呼ぶ音ハ音尾を鼻へ抜きて呼ぶが如き音ふて
例へばアン、カン、サン、アン、ナシ、民權、金錢等ふり民權と云
ふ言語を綴らんふハアとツとの字尾ふ各(一)の反点を附
してハと書が如し而して綴字上實際差隔あるや或ハ反
るを失念したるにハ其記號の上部又ハ左右の邊(一)
印を實着して其反音あるを示さべし尚や左の例に就て
見るべし

反呼の例

判任	綸旨	勅任	機葛
旅館	萬國	海軍	陸軍
急事	簡便	文字	電信
演說	公然	談判	南京
近藤	溫順	繁華	改進

第六章 詰て呼ぶ音の書き方

詰て呼ぶ音ハ發音を口の中ふて詰め呼ぶや或ハ力
を籠て呼ぶが如きものふて例へばア、カ、タ、多、云
ふがごとし此音ハ通常の記號を半分ふ書くを規定とす

れども若差開たるり或ハ失念したると記ハ(一)詰点を附
 是こと反呼の例ふ同トアイウエオの詰音ハ其字尾を結
 びて其詰りたるを示を又詰る文字ふ次の文字を其上ふ
 かさね記して詰呼とふをとり左の例ふ就て見るべし

例の呼詰

あ	い	う	え	お
堅倒	一定	鬱憤	謁見	夫
日本	筆記	月宮		
學校	立憲	節儉	八方	
牧群	月琴	幾光	出世	
活版	實驗	蔑視	歐羅巴	

第七章 疊て呼ぶ音の書き方及用ひ方

疊て呼ぶ音の書き方ふ四種なり。單疊、濁疊、複疊、複濁疊之なり

(一) 單疊呼といハ單ふ一音を疊むものふいて父母等の

如きを云ふ斯の如き場合にハ(一)の符を用ひ(ハ)

(ハ)と書くべし

(二) 濁疊呼といハ二字目の音の濁りたるものを疊むを

云ふ例ハ唯、幅等の如きものふいて此場合ふハ

(二)の符を用ひ(ニ)と書くべく之ハ單疊呼を濃

く書せしものなり

(三) 複疊呼といハ三、四等の如く二字以上の音を疊

むものふいて此場合ふハ(三)の符を用ひ(三)と

疊字及疊字の例

疊呼

一
ナ
ハ

濁疊呼

一
ク
ハ

複疊呼

一
イヨイヨ
アレアレ

複濁疊呼

一
クニグニ
ギリギリス

ア経疊字

一
カキクケコ

イ経疊字

一
ナシスセン

ウ経疊字

一
タチツテト

エ経疊字

一
ナニスチノ

オ経疊字

一
ヒフヘホ

(差示ス)

(立止ル)

(差止ム)



書くぞし

四 複濁疊呼とハホノぐソレぐ等の如く二字以上の濁

音を疊むものふいて(一)の符を用ひ(二)と書く

可くおれハ複疊呼を濃く書せしものなり

疊字の用ひ方とハ同ト行の文字二個以上連なる時ハ用

ゐるを云ふ例ヘバ指止ム即ち(一)を立止ル即ち(二)を

と書くが如し又カキクケコを行なればカキクケコ

タチツテトを行なればタチツテトと書く其他各行とも疊字の用

ひ方ハ此例ハ異なることあり尚右左の例題ハ就テ會得

そへ

第八章 詞尾の略記

詞尾の略記ふ三種あり名詞の詞尾、形容詞の詞尾、副詞の詞尾之なり

名詞の詞尾 此詞ハ形容詞より轉リ來タルものゝ
一てサ、ミ、ゲ、の三字ハ詞尾を變トて名詞トふを例ヘバ
高キ、廣キ及其他の形容詞の詞尾ふるキを高サ、高ミ、高
ケ、廣サ、廣ミ、廣ゲ、厚サ、厚ミ、厚ゲ、深サ、深ミ、深ゲ、長サ、長
ゲ、強サ、強ゲ、重サ、重ミ、重ゲ、赤サ、赤ミ、赤ゲ、黒サ、黒ミ、黒ゲ、面
白サ、面白ゲ、嬉シサ、と書くる如ク

形容詞の詞尾 此詞尾ハ名詞或ハ動詞の詞尾を變トた
るものゝ一て六ナリ即チナ、キ、シキ、ラシキ、ル、ラル、
等之ふり仮令バ大ナ、赤キ、美シキ、男ヲ、流ル、教ヘル、等の如ク

此六詞尾の中ナと云ふハニルの約言なるナと云ふ字
より轉リたるものゝ一てキハ元來の形容詞の詞尾な
リシキハシの字を以テ終リたる動詞の後ふキと云ふ
形容詞の詞尾を加へて形容詞ト爲リたるものゝ一て
ラシキハ似寄リたると云ふが如き意味を含有する者な
リル、ナル、ハ動詞の分詞直チハ形容詞トふれる者也
副詞の詞尾 此詞尾ハ名詞或ハ形容詞等の詞尾を變
トたるものゝ一て三種ナリ即チク、シク、ラシク、是ナリ仮
令ハ赤ク、美シク、女ヲシク、等の如クニクハ終リたる詞ハ元
來の副詞ふ一てシク、ラシクハ形容詞の詞尾ふるキをク
に變トて副詞トナリたるものナリ

尚各例とも左の凡例ハ附テ了解スベク

此略字ハ言語ことばの尾おに附つくるものゝて意味なきが如く
ふれども言語の詞尾お之を附つされば正ただき言語文章
をなさば且つ最も多く使用もちするものなれば綴字ていじよ次つぎて
速すみふ暗記あんきするを要いふ此等の文字ハ單ただふ獨立どくりつしてハ意
味なれものゝて必ず綴字の詞尾おのみ附つくる者なり
決して綴字と別々べつべつふ記載きざいせしむものゝ非あらば尚例題れいだいふ
就すなはて見るべし

第九章

語格の略記(捨かるも云々)

詞尾略記

名詞の詞尾

リ-----サ	-----ミ	-----ゲ
凡 例		
└-----高サ	└-----高ミ	└-----高ゲ
└-----廣サ	└-----廣ミ	└-----廣ゲ
└-----清サ	└-----清ミ	└-----清ゲ

形容詞の詞尾

-----ナ	-----キ	()-----シキ	()-----ラシキ	-----ル	-----ラル
凡 例					
└-----暖	└-----赤キ	└-----美シキ	└-----女ラシキ	└-----流ル	└-----誉ラル
└-----奇麗	└-----高キ	└-----可笑シキ	└-----男ラシキ	└-----浅ル	└-----教ラル
└-----真白	└-----白キ	└-----正シキ	└-----虚ラシキ	└-----駭ル	└-----捨ラル

副詞の詞尾

-----ク	-----シク	-----ラシク
凡 例		
└-----赤ク	└-----美シク	└-----女ラシク
└-----白ク	└-----可笑シク	└-----虚ラシク

数字略記とハ一般用ひ來れる処の西洋數字を以て其一部分分ふ愛畫を附して凡例の如く各種の場合に用ふるものとす然れども此寫真法に用ふる記號を以て我國從來のいろはの如く自在に記載せんと欲得るに至らば却つて数字略記を用るよりハ寧ろ記號の方ハ便利なるべし

第十章 数字略記

語格の略記

一	ガ	レ	ヤ	レ	バ	レ	ヤ
一	ハ	レ	ヨ	レ	ヨ	レ	ハ
一	ノ	レ	ハ	レ	ニハ	レ	モ
ハ	ニ	レ	ニ	レ	ニモ	レ	ハ
ノ	ヲ	レ	ヲ	レ	ニゾ	レ	ハ
ハ	ヘ	レ	ヘ	レ	ニヤ	レ	デハ
ハ	モ	レ	モ	レ	ニヨ	レ	ゾハ
レ	ト	レ	ト	レ	デバ	レ	ゾト
ハ	デ	レ	デ	レ	ヲモ	レ	ゾヤ
ハ	ゾ	レ	ゾ	レ	ヲゾ	レ	ゾヨ

凡例

月ハ	馬ガ	星ノ	風ニ	空ヘ
雲ヲ	霜モ	鳥ト	品デ	花ゾ
咲キ	散リ	アルモ	ソレヲ	彼ヘ
之ノモ	ソレト	彼ノデ	霞ニモ	雲トヤ

第拾一章 略語

略語に七種あり即ち名詞代名詞形容詞動詞副詞後詞接續詞之なり

- (一) 名詞といふ有性無性の別なく萬物の名目ふいて無形のものゝ雖ども亦人意中に事物と爲て名詞となることあり
- (二) 代名詞といふ言語文章中ふに於て屢々名詞を反復して重複呼び或は記をと記其繁雜を避けんが爲め名詞の代りに用ふる詞あり
- (三) 形容詞といふ名詞の現るたる動植事物の性質形狀を精しく示る者ふいて常ふ名詞の前置く詞あり
- (四) 動詞といふ事物の作動仕業等百般の狀態を示す詞あり

十位	1	2	3	4	5	6	7	8	9
百位	1	2	3	4	5	6	7	8	9
千位	1	2	3	4	5	6	7	8	9
万位	1	2	3	4	5	6	7	8	9
十万+	1	2	3	4	5	6	7	8	9
百万+	1	2	3	4	5	6	7	8	9
千万+	1	2	3	4	5	6	7	8	9
億+	1	2	3	4	5	6	7	8	9
兆+	1	2	3	4	5	6	7	8	9

—88—

年號月日	明治十八年十月二十八日	2 / 18 / 28
尺 度	壹丈二尺三寸四分五厘	12 3' 4 5
衡 量	壹貫二百四十五匁六分七厘	1245 67
斗 量	壹石二斗三升四合五勺	123 45
度 數	三周八字十七度二十三分五十秒	3.8, 17' 23" 15"
金 錢	百二十三圓四十五錢六厘	123 456 8
時 刻	午前十時二十三分四十五秒 午後六時四十五分三十二秒	10' 23' 45" / 6' 45" 32"
里 程	百五十里二十五丁三十間	15 25 / 30

—88—

ふして實に言語文章中主格の名詞と共に最も首要の詞あり故に一の働詞を缺くと雖ハ全く言語文章を為さざるを以て其意味の通じると能はざるものなり

(五) 副詞とい働詞或ハ形容詞に添て其模様を尚詳く示す詞ふして常に働詞及び形容詞に副る詞なり

(六) 後詞とい名詞またハ代名詞及び其他の詞の後に添ひて語格の略記ふ等しく前後の詞の係り合現として位置時限などを明らかふ示す詞ふして元來の後詞もたれども働詞より轉したる詞も亦多し

七 接續詞とい前後の言語文章を連續せしむる詞ふ

して名詞の位地或ハ作動を審定し事物或ハ文意を連續し殊に詞を續て語句を合せ全文をふまゝあり

以上説く如く七詞ふ別つと雖ども其數ふ至る極りなきものなれば今普通ふ用ふる必用なる略語のみを左に掲ぐ各詞とも其表し就き其形の大小墨の濃淡等ふ注意して熟習をべし然れども初學のうちハ餘り略語ふのみ依りて書取らんと欲せば聽聞する所の言語中是も略字ふふれや彼も略語ふあらざるやと大に躊躇し為し運筆の滞滯を來し却て速ふ筆記し能とざるものなれば初學の際ハ尋常の綴字及び詞尾語格の略記のみを習練し熟達の後略語を使用して練習するを可とす

代名詞の略語

^-----如何

|-----誰

|-----其

—-----我

|-----夫

6-----是

/-----彼

C-----汝

C-----者

形容詞の略語

^-----聊

—-----大

C-----一ツ

9-----細

C-----長

6-----二ツ

2-----小

7-----真

6-----三ツ

6-----多

J-----太キ

C-----皆

/-----凡

|-----古キ

C-----此

—-----僅

C-----新キ

C-----様々

—-----全

、-----總

P-----少

名詞の略語

P-----繁昌

/-----事

C-----人間

/-----實（際地）

7-----日本

C-----新聞

7-----程

9-----仔細

7-----勉強

C-----人

/-----所

C-----筆記學

7-----智識

7-----筆記者

7-----格別

/-----目的

C-----大切

/-----精神

/-----詳

7-----推測

副詞の略語

ノ	况	ノ	唯	一	蓋
一	苟	ノ	直	ノ	決
ノ	未	ノ	譬	一	再
一	愈	ノ	抑	ノ	茲
ノ	甚	ノ	常	一	恰
一	俄	ノ	尚	一	間
ノ	時	一	何故	ノ	相
ノ	然	ノ	寧	ノ	最
ノ	必	ノ	將	ノ	若
ノ	忽	一	蓋	一	既

動詞の略語

ノ	働	一	掲	ノ	續
ノ	始	一	考	ノ	尽
ノ	扱	一	限	一	做
一	計	一	兼	ノ	無
ノ	欲	ノ	讀	ノ	得
ノ	可	ノ	宜	一	能
ノ	取	ノ	謂	一	如
ノ	思	ノ	正	ノ	令
ノ	及	一	候	ノ	用
ノ	同	ノ	也	ノ	為

第十二章

略文記號

略文といハ熟語或ハ平常多く用ふる所の簡單なる略語或ハ一二三の語句を合したるものゝいて其使用方法の如きふ至りてハ毫も略語と異なることあり且つ諸種の畧語を總て暗記せは自分容易ふ之を組立てることを得るなり

又略語略文或ハ最初記載したる綴字の後ちふ屢々記載せざるべからざる綴字の長きものハ其語の首字を採之之きふ綴或ハ横線を畫し加點を為して略記するところを熟練せば聞くに從つて忽ち略語を制定するを得るものゝいて實際ふ於てハ最も至便至益なる法と見然れども此の法を屢々實際の筆記ハ從事熟練の巧を積むふ

後詞の略語

「-----ニス	へ-----トテ	ノ-----ノミ
リ-----ニシ	ハ-----於	、-----マデ
へ-----ニテ	ク-----カラ	シ-----コソ
「-----トス	い-----却	「-----シテ
リ-----トシ	ハ-----ヨリ	シ-----以

接續詞の略語

(-----雖	・-----並	ノ-----故
(-----共	ハ-----下	—-----如何ナカバ
(-----且	ハ-----又	・-----而
レ-----其故	ハ-----或	「-----即

略文の例

〜	元来	㇀	用法
㇁	斯ノ如シ	㇂	左ノ用法
㇃	斯ノ通り	㇄	遮莫
㇅	如斯場合ニ於テ	㇆	可成的速
㇇	未ダ曾テ有ラス	㇈	善
㇉	兩立シ難シ	㇊	大
㇋	必ズ致シマス	㇌	スル所ナリ
㇍	必ズ致シマセン	㇎	スル所ノ者ナリ
㇏	出来可カラス	㇐	者ナリ
㇑	熟々惟ミルニ	㇒	者ニシテ
㇓	由是觀之者	㇔	者ナレバナリ
㇕	ゾロクハナシ	㇖	有ク如シ

何らざれば容易ふ為に能くざるものあり不熟練の筆記
 者ふいて漫りふ此法に依らんと欲せば却て錯雜を來し
 筆記者自身ふいても筆記せし後ら之を反文するふ困難
 を來すものあり能く注意せざる可からば今左ふ數種の
 記號を掲ぐ其例ふ就て會得せざる

第十三章

加點法(語格
働詞)

加點法とい略語或ハ綴字の上下左右首尾等ハ單ある點
又ハ符號を附記して語格及び働詞の法、時限等を明らふ
そのの法なり是に二種あり語格加點法、働詞加點法即ち
是なり

語格加點法とい略語の上下左右ハ單ある點又ハ語格略
記を附記して尚語格を一層簡便明瞭ハ示さるのなり其
位置の如きハ左の例題ハ就テ會得をべし

働詞加點法とい働詞の略字或ハ其綴字に一二の點及び
助働詞を附記して働詞の自他、能受、可否、時限、法等を詳明
せしむることを云ふなり

自他とい自働詞、他働詞のふり自働詞とい文主獨自ら

作動するものにして他の物ハ移るゝを他働詞なり他働

詞とい文主の作働能く他の物ハ及達する働詞なり

能受とい能働詞、受働詞と云ふの義あり能働詞とい自分
の働きの能く他の物に及達するの働詞なり受働詞とい

他の者の働きを自分に受る働詞なり

可とい自他能受の別なく一般の働詞の働きを云ひ否と
ハ其働きを打消せと云ふなり

時限とい働詞の作動する時刻を定むる者ふして之ハ三
あり過去、現在、未來の別あり過去とい已ハ過ぎ去りたる
時限ふして現在とい今日為る働を示し未來とい以後為
さんとする働を示さるのあり

過去ハ第一過去(又半過去第二過去第一大過去第二大過

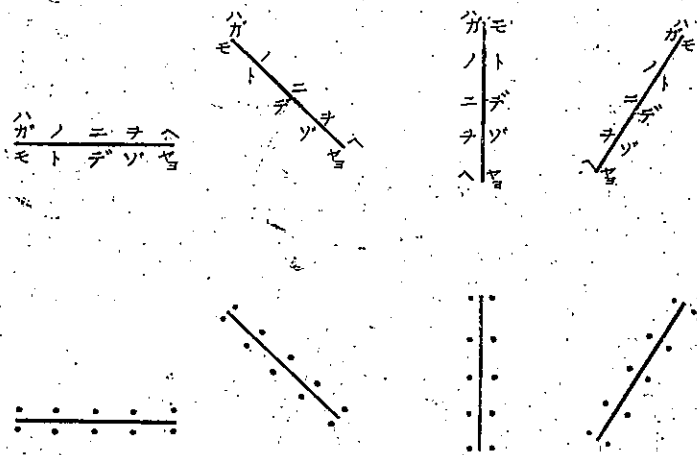
去の別あり第一過去といアリタリ等と現在に近き働を示すものより第二過去とい全く過去りたる働を示すものより第一大過去とい第一過去と第一未来と合したるが如きものより第二大過去とい第二過去と未来と合したるが如き働を示すものより
未来に第一未来第二未来の別あり第一未来ハアラセン。第二未来ハアルナシ。スルナシと云ふ如く右の七時限ハ左の働詞加點の例に示す如く一(現在)(過去)二(第二過去)三(第一大過去)四(第二大過去)五(第一未来)六(第二未来)の點を附記を
自他の働を示すより自働詞の略記及び綴字を――の線を以て其中央を切斷すべし
能受可否を示すにハ略語及綴字の首尾上下ハ時限標を附記すべし

其位置の如きハ畧字及加點の位置に依て別りたる左の働詞加點表及働詞の法即ち不定法以下の各表に就て會得べし
働詞の法といハ九事話を話に其働きの次第を定め自他の區別を現すの法則より之ハ六ツあり不定法命令法可成法約束法接續法疑問法即ち之なり

(一) 不定法といハ文主なく只時限のを定め働きの一般を示す者なり之ハ文主を置く時ハ直接法となるあり
(二) 命令法といハ指令を現すの法より希求を關するを現す者より之ハ現在にのみある者ふれば其加點の位地ふ(一)命令標を附記をぞし

(三) 可成法といハ命令法と約束法の両意を含める者なり之ハ不定法の後ハ可シ及び今ひと云ふ語を

語格加點法例



加點ノ位置兩方トモ照合セ見ル可シ

語格加點の凡例

我ハ	我ノ	我ニ	我ヲ	我ヘ
我モ	我ト	我デ	我ゾ	我ヤ
人ガ	人チ	人ハ	彼ニ	彼モ
所	所ヘ	所デ	者ガ	者ゾ

右六法加點の位置ハ左の各表ふ就テ會得をへし

(六)

(五)

(四)

附するものふして是も亦命令法と全くと加點の位置ふ(ハ)可シ或ハ(ノ)令ムといふ畧字を可成標と爲して附記を可し

約束法とハ人と約束を表する法とこれふゾヨの二種ある者ふして時限標と合して之を附記ふし

接續法とハ上の語句と下の語句と續きたるものと法のふしてこれふハバトデモ此の五種あり是亦約束法と全くと時限標と合記をる

疑問法とい疑ふことを入ふ問ひ尋ぬる働を示す法とこれふハカヤの二種あるものふして是も亦約束接續兩法の如く時限表と合記をべし

不定法

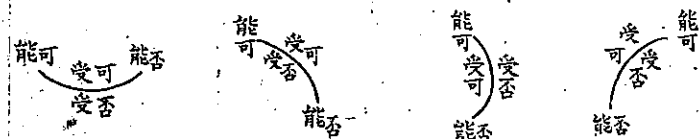
能受	能働		受働	
	可	否	可	否
現在	スル	セヌ	セラル	セラヌ
半過去	セリ	セザル	セラレシ	セラレズ
過去	シタリ	セザリシ	セラレタリ	セラレザリシ
第一大過去	セルナラン	セザルナラン	セラレシナラン	セラレザリシナラン
第二大過去	シタルナラン	セザリシナラン	セラレタリナラン	セラレザリシナラン
第一未來	セン	セザラン	セラレン	セラザラン
第二未來	スルナラン	セスナラン	セラルナラン	セラヌナラン

働詞加點法

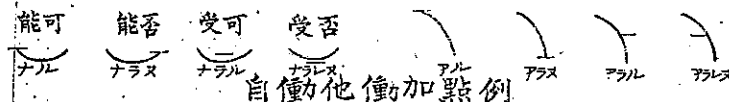
働詞時限の點

現在 ----- 半過去 ----- (過去 -----) 第一大過去 ----- (第二大過去 -----)
 第一未來 ----- / 第二未來 ----- /

全能受及其可否之位置



現在能受可否働詞加點の例



他働詞

自働詞

他働之形	自働之形	自働之形	他働之形
始ハジム-----)	ハシムル-----)	知シル-----)	シナス-----)
續ツヅク-----)	ツヅクル-----)	接ハカドル-----)	ハカトラス-----)
用モチフ-----)	モチフル-----)	思オモフ-----)	オモハス-----)

綴字の例

接ヌク-----)	ヌクル-----)	起オオス-----)	オオス-----)
開トヅ-----)	トヅル-----)	醒サメル-----)	サマス-----)
延ノブ-----)	ノブル-----)	眠ネムル-----)	ネムラス-----)

(ゾー) 約束法 (之一)

能受	能働		受働	
	可	否	可	否
時限可否				
現在	ア スルゾ	セヌゾ	セラルゾ	セラヌゾ
半過去	セシゾ	セザルゾ	セラレシゾ	セラレザルゾ
過去	シタルゾ	セザリシゾ	セラカルゾ	セラザルゾ
第一 大過去	セシナラシゾ	セザリナラシゾ	セラレシナラシゾ	セラレザリナラシゾ
第二 大過去	シタリナラシゾ	セザリナラシゾ	セラレタリナラシゾ	セラレザリナラシゾ
第一 未來	センゾ	セザラシゾ	セラレンゾ	セラレザンゾ
第二 未來	スナラシゾ	セヌナラシゾ	セナルナラシゾ	セラヌナラシゾ

命令法

能受	能働		受働	
	可	否	可	否
時限可否				
現在	アレヨ	アルナ	アラレヨ	アラルナ
可成法 (之一)				
現在	アルベシ	アルベカラズ	アラレベシ	アラレベカラズ
可成法 (之二)				
現在	アラシムル	アラザシムル	アラレシムル	アラレザシムル

能受	能働		受働	
	可	否	可	否
時限	可	否	可	否
現在	スルト	ゼヌト	ゼラルト	ゼラレスト
半過去	ゼシト	ゼザルト	ゼラレシト	ゼラレザルト
過去	シタルト	ゼザリシト	ゼラレタルト	ゼラレザリシト
第一大過去	ゼシナラント	ゼザリナラント	ゼラレシナラント	ゼラレザリナラント
第二大過去	シタルナラント	ゼザリナラント	ゼラレタルナラント	ゼラレザリナラント
第一未來	ゼシト	ゼザラント	ゼラレント	ゼラレザラント
第二未來	スルナラント	ゼスナラント	ゼラレシナラント	ゼラレズナラント

能受	能働		受働	
	可	否	可	否
時限	可	否	可	否
現在	スルモ	ゼヌモ	ゼラルモ	ゼラレストモ
半過去	ゼシモ	ゼザルモ	ゼラレシモ	ゼラレザルモ
過去	シタルモ	ゼザリシモ	ゼラレタルモ	ゼラレザリシモ
第一大過去	ゼシナラシモ	ゼザリナラシモ	ゼラレシナラシモ	ゼラレザリナラシモ
第二大過去	シタルナラシモ	ゼザリナラシモ	ゼラレタルナラシモ	ゼラレザリナラシモ
第一未來	ゼシモ	ゼザラシモ	ゼラレンシモ	ゼラレザラシモ
第二未來	スルナラシモ	ゼスナラシモ	ゼラレシナラシモ	ゼラレズナラシモ

(ト……) 接續法 (之五)

能 受	能 働		受 働	
	可	否	可	否
時 限	可	否	可	否
現在	スレテ	セ子テ	セラルテ	セラヌテ
半過去	セシテ	セザルテ	セラレシテ	セラレザルテ
過去	シタルテ	セザリシテ	セラタルテ	セラザリシテ
第一 大過去	セシナランテ	セザリナランテ	セラレシナランテ	セラレザリナランテ
第二 大過去	シカルナランテ	セザリナランテ	セラレカルナランテ	セラレザリナランテ
第一 未 來	セシテ	セザランテ	セラレンテ	セラレザランテ
第二 未 來	スナランテ	セヌランテ	セラレナランテ	セラレヌランテ

(デ……) 接續法 (之四)

能 受	能 働		受 働	
	可	否	可	否
時 限	可	否	可	否
現在	スレデ	セヌデ	セラルデ	セラヌデ
半過去	セシデ	セザルデ	セラレシデ	セラレザルデ
過去	シカルデ	セザリシデ	セラレカルデ	セラレザリシデ
第一 大過去	セシナランデ	セザリナランデ	セラレシナランデ	セラレザリナランデ
第二 大過去	シカルナランデ	セザリナランデ	セラレカルナランデ	セラレザリナランデ
第一 未 來	セシデ	セザランデ	セラレンデ	セラレザランデ
第二 未 來	スナランデ	セヌランデ	セラレナランデ	セラレヌランデ

(ヤ---) 疑問法 (之二)

能 受	能 働		受 働	
	可	否	可	否
時 限 可 否				
現在 一	スルヤ ノ	セヌヤ ノ	ゼラルヤ ノ	ゼラヌヤ ノ
半過去 〇	セシヤ ノ	セザルヤ ノ	ゼラレシヤ ノ	ゼラザルヤ ノ
過去 〇	シタルヤ ノ	ゼザリシヤ ノ	ゼラレタルヤ ノ	ゼラザリシヤ ノ
第一 大過去 〇	ゼシナラヤ ノ	ゼザリナラヤ ノ	ゼラレシナラヤ ノ	ゼラザリシナラヤ ノ
第二 大過去 〇	シカレシヤ ノ	ゼザリシナラヤ ノ	ゼラカレシヤ ノ	ゼラザリシナラヤ ノ
第一 未來 〇	センヤ ノ	セザラシヤ ノ	ゼラシヤ ノ	ゼラザラシヤ ノ
第二 未來 〇	スレシヤ ノ	ゼヌシヤ ノ	ゼラムシヤ ノ	ゼラヌシヤ ノ

(カ---) 疑問法 (之一)

能 受	能 働		受 働	
	可	否	可	否
時 限 可 否				
現在 一	スルカ ノ	セヌカ ノ	ゼラルカ ノ	ゼラヌカ ノ
半過去 〇	セシカ ノ	セザルカ ノ	ゼラレシカ ノ	ゼラザルカ ノ
過去 〇	シタルカ ノ	ゼザリシカ ノ	ゼラレタルカ ノ	ゼラザリシカ ノ
第一 大過去 〇	ゼシナルカ ノ	ゼザリナルカ ノ	ゼラレシナルカ ノ	ゼラザリシナルカ ノ
第二 大過去 〇	シカレシカ ノ	ゼザリシナルカ ノ	ゼラカレシカ ノ	ゼラザリシナルカ ノ
第一 未來 〇	センカ ノ	セザラシカ ノ	ゼラシカ ノ	ゼラザラシカ ノ
第二 未來 〇	スレシカ ノ	ゼヌシカ ノ	ゼラムシカ ノ	ゼラヌシカ ノ

第十四章 節譜

言語及び語句の抑揚を識別するふ三つあり

強音、撃節、語勢

(一)

強音とは一語中の音韻の抑揚を明ふ示すものにして例へば神上、橋箸の如き音の抑揚あるものふ凡例の如く音の強き方に強音點を附記し紙端の如き抑揚のふきものふは之を附せざるあり

(二)

撃節とは一句一章の語尾の抑揚を明かふ示すものふして例へば問の語句ハ語尾の揚るものふれば是ふハ凡例の如く語尾ハ揚點を附記し又答の語句の如きハ語尾を抑るものふれば抑點を附するも猶問の如し

(三)

語勢とは言語章句中主眼とふる可き語を明く示すものにして例へば自由論の演説ふれば自由とか又佛教演説ふてハ佛と何れもふらば其演る所の緊要なる語句ハ一小波線を附記するも凡例の如く其用ハ彼の圈點を附するも異ることあり

例へば凡例ふ於る示を如く筆記學と云ふ語ハ其文に於ての主眼たればあり

第十五章

句讀法

人の言語を寫真するに其句讀段落等を示す標あり即ち左の表に掲ぐる二十七符之あり

○句讀點ハ一言一句の句讀を示すに用ふるものなり

○半重點ハ二三の語句を示す句讀點より

○重點ハ言語文章の一小段落を示すに用ふる者あり

○引用點ハ古人の格言或ハ他の語を引用したるを示す

○其語句の前後ふ之を附するものあり

○段落ハ語句の全く了りたる所を附して其實結したる

を示すものあり

○括弧ハ一語一句に注を加へ或ハ細解を下すと記し用

ふるものあり

ノ-----強音 へ 揚 ノ-----抑 撃節 ~~~~~語勢

強音の例

上

神

紙

箸

橋

端

撃節の例

アハハ

ビツガクナ

ゴベキヤウ

ナナル

？
X
カ

ハイ

ベキヤウ

イタレマス

語勢の例

ニツポン

パウチヤウ

ビツギ

ガククワハ

パウチヤウ

ビツガクナ

ケキヤウ

スル

トコロ

ナリ

○副弧ハ括弧中の語句ハ尚一層の註解を下すと記し用ふるものあり

○章條節等ハ語句の中第何章ふどあると記し其第何章等の文字を省きて單ハ此標及び其數字のみを附記して其第何章條節を示すものあり

○番號も亦前と異なるものあり

○連語線ハ數行の語句を統轄し一の語句を附すると記用ふるものあり

○省文線ハ前ふ一たび記したる事項を再び記するとき前文を再び同文を記するも徒勞ハ屬する者ふれば之を省略するに用ふ

○指示ハ筆記文中須要の事項を一目ハ見出し易からし

めん々ためハ此文の首めハ記し置くものなり

○模形ハ發言中手を彼の位此の位など其席ハ在る所ハ物品を指示して物の大小など指示すると此圈内ハ其大概の大きさを數字ふて記載し置くものあり

○雙畫十字標襖十字標星標等ハ前ふ一たび述べたる言語ハ再三再四筆記せざるべからざると記し其最初の綴字ハ此等の標を附記し置き次より此標のみを使用して前記の語句を省略する者あり故ハ演説などを筆記するに於て豫ハ演題ハ依りて如何なる語句ガ本論ハ就て屢々出づるならんやを測定し此標を代用し置くことハ筆記上極めて便益あるべし

○添注標ハ筆記文中ハ誤脱等のあると記或ハ演者より

其誤脱等の挿入を望まれとて此標を挿入れざる者あり

○オフレックセント

廢文標ハ筆記したる文中ハ不用ハ属する所又ハ廢案消滅ハ歸したる字句の前後ハ之を附記ス

○キャプチュル

文首標ハ筆記の文首又ハ段落を示したる後ハ再び筆記せると記必之を附記して其文首を示すものなり

○ハイフン

連字標ハ一行の終りハ一語の綴字を記載し卒り兼ると之を附記して其綴字の次行ハ連續するを示すものなり

○インクウェンション

疑問標ハ問の文句の語尾ハ必ず附記すべきものなり

○ワイルドカード

未完標ハ一葉の紙片ハ筆記し卒らばして次葉ハ續く可きを示すものなり

○アークウェンション

承前標ハ前葉ハ續て筆記したるを示すものなり

○インデント

完了標ハ一の演説など演じ卒り其筆記も茲ニ卒りたるを示す大段落の標なり

廿七標

、……句讀點

;……半重

:……重

→……引用

×……段落

()……括弧

〔 〕……副弧

G……第何章

Λ……條

§……第何節

N……（卷頭）

{ }……連語線

(—)……省文

☞……指示

⊖……換形

||……雙畫

+……十字標

⊥……複十字

——●——

*……星標

^……添註

{ }……廢文

〃……文首

=……連字

?……疑問

—○—……未完

—○—……承前

—○—……完了

第十六章

感詞の標

感詞といふ事物作動等小係るゝふり唯心小感動するゝ
 して覺えに發する聲ふして詞の首ふ在りて言語文章の
 意味を強く或ハ詞尾に在りてハ文意を構成する者ふ
 り之ふ十六の標あり左の標は就に見るべし

招呼の感詞ハ

ヨイク。コレク。アノネ。杯云ふの類ふり

勸勵の感詞ハ

サア、の類ふり

歡喜の感詞ハ

ヲヤク。ヘーの類ふり

鎮止の感詞ハ

叱。シイ。のるゝふり

忿怒の感詞ハ

ヤラレ。咄の類ふり

感慨の感詞ハ

ア、イ、の類ふり

哭泣の感詞ハ

フン、杯泣く聲ふり

感 詞

十六 標

ㄥ 招呼之標

ㄣ 勸勵

ㄣ 歡喜

× 忿怒

丨 感慨

× 哭泣

× 驚嘆

× 鎮止

ㄣ 發笑之標

ㄣ 嘲笑

7 咳嗽

∠ 打噴

∠ 打咽

∠ 喊啼

V 打咤

Λ 嘔浪

驚嘆の感詞ハ コハ、ヲヤ、マア、モー、等の類あり
 發笑の感詞ハ ハハ、ヘハ、ホハ、ふどの類あり
 嘲笑の感詞ハ マー、杯嘲り笑ふの聲あり
 咳嗽の感詞ハ エヘン、オホシふと咳拂の聲あり
 打噴の感詞ハ ハクシヨシ杯くさめのこゑあり
 打咽の感詞ハ ヘッエ、ふどあやぐりの聲あり
 喊啼の感詞ハ アーア、エー、杯欠ぐの聲あり
 打咤の感詞ハ チョッ、ツァ、杯舌打の聲あり
 嘔浪の感詞ハ ウエ、ウエ、杯嘔氣の聲あり
 總て感詞ハ心で感して覚えび發する聲ふれば其音の形
 らまゝに直ちふ記號を以て書き其の尾ふこの標を附記
 するべし

第十七章

記號連綴の例

言語を寫し取るの仕方ハ前章まで章を重ねて記した
れば今各々其仕方の定め就て記號連綴の一例を示さ
んとす

左の記號文ハ日本デパンニース スタレダ フォノグラフィ根元傍聴筆記法を考案され我國該
學の嚆矢たる我日本傍聴筆記學會々長源綱紀氏が本會
に於て筆記學の効用を演述されを筆記法即ち言語の
寫真法にて直寫せしものなり今其寫真文と譯文とを此
に掲げ記號連綴の例とあはせ

尚卷末の翻文を一読せば該學の効用及び經歷實事
就ての便利等を知るに至らん

記號文の例として、日本語「これは、私の本です。」を
傍聴筆記法で記したものと、その直寫（寫真）とを並べて示す。
記號文は、日本語の音韻とアクセントを模した符號で表され、
直寫は、その日本語をローマ字で直に記したものである。

此記號文の翻譯は左の如し

○日本傍聴筆記法の効用を述ぶ 源綱紀君演述
今私の傍聴筆記法の事に就て御話を致しに普通の論理は依り左の
四段に分て短簡にお話を致し候す
第一 傍聴筆記法を學ばざる可からざるの理由
第二 傍聴筆記法を制定あらざるの經歷
第三 傍聴筆記法の目的
第四 傍聴筆記法實事に就ての便利
諸第一の傍聴筆記法を學ばざる可からざる譯は今更事新ある申さ
ずともこの事ながら今と違ひて昔は府縣會と云ふものもなく町村會
と云ふものもなく演説討論などと云ふ事の勿論なく偶は政事向の
話でもあらと云ふ事が其時の御上様は聞えたと忽ち其者を上と恐

れぬ不埒な奴だと暗い所へ拘引され事によると大事々々の「ちやつぶ」の臺迄も飛ばさるゝ者も有りて實に怖ろした世の中なりしに打て替て今の世の府は府會あり縣は縣會あり其他到る所として何會何會と會の設け無きの所なく既に此程或活版製造所は就て聞く所は依るに近年に至りて會の字の活字が賣れること實に夥たしき事なりと云へば是よりも會合の昌んかゝるに推して知るべし誠なきことといふいふゆゑにわいゑる世界なりと謂ふ可し此會の中にも親睦會や同志年會といふ飲食會の外苟も某原案を討議し某の經濟を諮詢する等の會合は其他演説も討論も學術の講義も其事柄を世に公よすると否とは係らず其記録を要せざるものもありますまい其記録を爲すものに必だ傍聽筆記法に依るべきにかりますまい其

完全なる記録を要するものは是非傍聽筆記法を學ばねば成ますまいことから私が第二の日本傍聽筆記法を制定したる經歷を御話志はしやうが數年前よりどうか我國の言語を筆記する方法を考ひたいと色々な工夫をしたまど下手の考ひ体むに似たりて宜い事も仕出かまざる所明治四五年の頃より米國の學士「ロバート」といふ人によつて「アメリカン。スタンダート。フチノグラフィ」米國の傍聽筆記法を學びたまども西洋の言語と日本の言語とを組立も順序もまるで違つて居るは「アメリカ」の筆記法で日本語を筆記することゝ到底六つかしき事なまども何が善い法があるまいかと「ボアン」氏の「ステノグラフィ」。「バイロム」氏の「ライン。ライテンング」。「ヨーリング」氏の「レディーブル。シヨート。ヘンド」。「リンスレー」氏の

「タナグラファイ」「ストルジ」氏の「ステノグラファイ」(獨逸筆記法)「エテノグラファイ」佛國筆記法等を見て、皆大同小異のみみて一も日本語を筆記するに便益なるものありません故に大に苦心して十有餘年の後、漸く一の方法を制定し日本傍聴筆記法と名けたるを、追々有志者の傳聞する所となりて、竟に明治十五年十月本會を設立せしに至り始めて之を授業を試み其後屢々増補改良して名詞の格働詞の法及び時限を簡單明瞭に記載するを得るの加點法とを追加せしめ此法は歐米諸種の筆記法中未だ曾て之を有らざる所の一種の重寶なる我日本傍聴筆記法中の特有物であり、隨ず第三乃傍聴筆記法の目的は時事の報道を敏捷ならしめ又我國言語の改良を謀り或は有益なる諸外國の學術を仕入るに資本と爲る

其他百般の事柄數ふるに違ふ所はされとも先づ差當り我國の不完全なる言語を改良せんとす我國古志への言語は文章文章の言語と少しも變ることなかりしも中古漢學と云ふ大邪魔物が飛びださ來りあるを以て言語通りを書くに俗たとか何とか自分勝手な屁利屈を附けて種々様々な文の体裁を拵へあるも其頃ハ暇が奴ばかり澤山あるから宜いけきども今の此忙な世の中は漢學などといふ様な暇つぶしの學問はとらりと止めて言語文章とも同一なる國と致したい先づ我國の言語文章一様ならざるの一例を掲げんは「あなたハ傍聴筆記法を御學びなさいとすべし」と云ふと文章を書く時ハ「貴君傍聴筆記法を講習するや否や」とか何とかいひや堅つ困るく書くねばならぬ様な今日の有様なり此堅つ困る四角四面な文

字や言語の學者ばかり用ひて居るは宜ひけれど我面白くの人こそ
 らせて誰へても彼へても珍文漢語を六暗矢繼に用ふるが爲めは竟
 んの判然と惘然迴旋と風船因循固執とよんじんごばうと間違ふ様
 なことよなります又今の議事録とか何會日記とか何學講義筆記と
 か云ふものを見るは實際は傍聴者たるものと云ふて變て天晴博識の
 先生等のみ御揃ひで權兵衛太郎兵衛どのなど一人もおいでなさ
 らぬ様は書てあると云ふは其筆記を拵る人の四角四面の漢字好の
 先生達が寄てたかつて其ては文章の抑揚がいかにか文字が何と
 か波瀾が何とか下らぬ事且暇を費やして拵る文けありて、是て其あ
 の其さう志て其と一分間に五六十も其と云ふ言葉を云ふ人でも筆
 記て見れば誠に立派な作文がしてある代りよ往々事實と齟齬し

て居るものと多く是と云ふも全く是迄傍聴筆記法と云ふものあるは
 御氣が附きだ學者先生のご自分の我儘勝手は其速なる趣旨を取摘
 んで作^文となさるからの事なり我傍聴筆記法の目的は漢學者と云ふ
 字引先生等がまづいやか文字が間違て居ると云ふが聊頗著せし
 てたとへ一分間も其と云ふ字を百も二百も云ふがそれが今の日
 本の人の言葉かきは御粗末ながら其通り記載して摘發公布しあ
 からは道の權兵衛太郎兵衛先生でもないやこれたまらぬと漸々言
 語を改むる様もあり竟に言語文章一様になりゆくは明々瞭々と
 して火を見るよりも明かなりと云ふべからぬ漢語を違ふと費ら
 るゝならんか

第四の傍聴筆記法實事と就ての便利といふは我國従来用る所の和

る所を御坐いますしやう

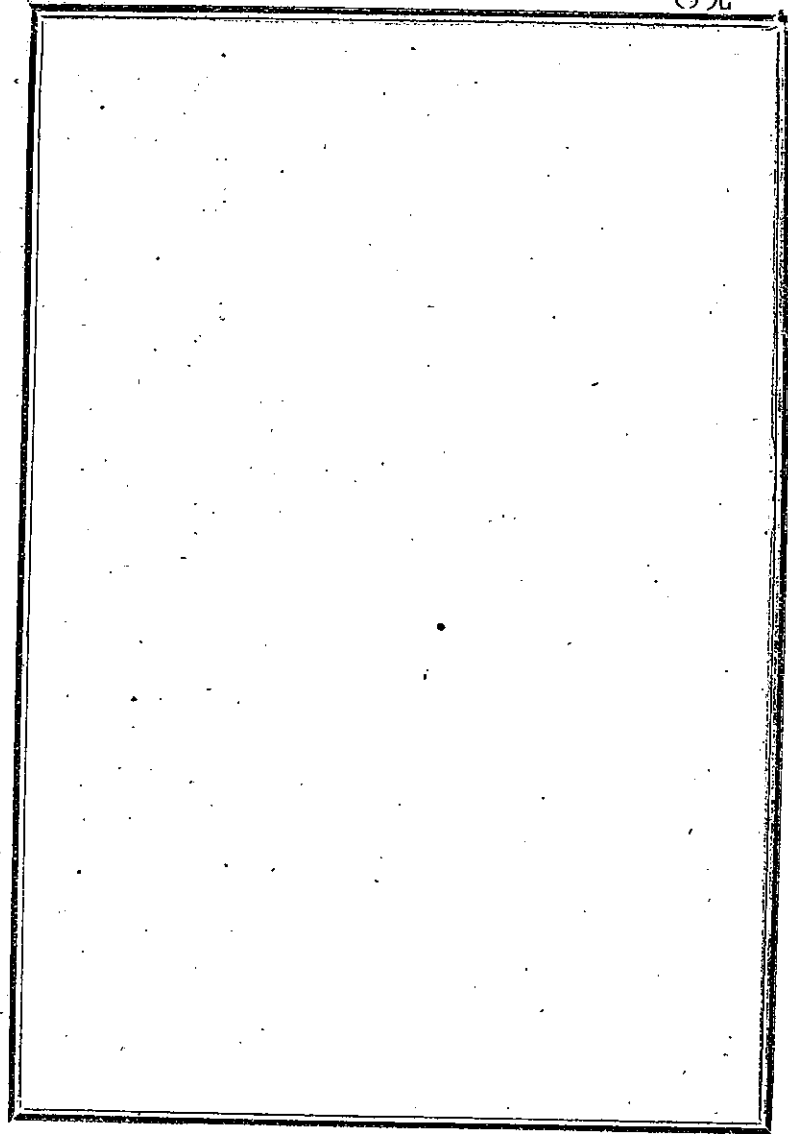
附言

編者曰く本書は専ら初學の階梯を供せしものなれば極めて簡單なるを主とし其あらましを記すは止まり尚大切の事項あるをも省きて載せざ且文中意義の明瞭からざる所なれを保證せ然れども之をして言語直寫の術を學ぶの手ほどきとかさば或は初學の諸氏を益するあらん乎讀者夫れ之を諒せよ

尚右に記せし記號連綴の例は只其体載を示せしまでもなれば初學よして一讀能く其文意を譯すると能はば依て不日此書よりれた

る須要の事柄及び初學の諸氏に諱りやすき例題を記き載せて寫真法の一般を脩めんとすも此學は萬望の方々の續編の出るを待て本書と照看し給えんとす

言語の寫真法終



改

漢字の類聚を省かんとして羅馬字を會に起す
 の借物を退けて又借物を用ゐるは同一國に於て
 而して假名の會を起さざる當然なりと雖も年々
 彼の借も亦任用せる語彙のため此を無借名とし
 棚隅に押遣らるるが今出で其謀を掃蕩せし行
 んと爲るゝ如何せん出眠然たるの間どい各國交際の
 際いづれ萬事のべく語を書いたるべきは未だ完
 全すといふるからば是れ日本偏聽筆記學を會と稱
 するは源網紀先生の創なりと實に會を丸山平次郎

大阪	書籍會社	京都	駿々堂支店
同	森本專助	同	東枝吉兵衛
同	野村長兵衛	同	川勝徳治郎
同	中川彌三吉	同	内山龜太郎
同	華本文昌堂	同	石田榮
東京	辻岡文助	同	田中治兵衛
同	小林鉄次郎	同	杉本甚助
同	春陽舍	同	福井孝次郎
同	高崎修助	神戸	弘讀社
高知	澤本駒吉	同	高瀬文徳堂
全	山中專助	同	弘榮社

同	關城社	和歌山	津田源兵衛
大津	澤宗次郎	名古屋	片野東四郎
同	澤一二郎	同	石版舍
徳島	阪井萬吉	岐阜	春陽舍
廣島	早達舍	信州松本	高美甚右衛門
有馬	淺野半六	其他	各店

大阪心齋橋筋二丁目十三番地

發賣兼製本所 森玉林堂



廣告 日本傍聴筆記學會大阪支會本部ヲ東區本町四丁目淨照坊ニ
 置半同ノ分會ヲ島ノ内心齋橋大寶寺町英學獨習會内ニ設ケ追テ
 北西兩區ニモ開キテ廣ク教授ス 大阪支會幹事

駸々堂本店新服書目

- 英學自宅獨習新誌 每月三回發行 ●目覺珍聞 每月三回發行
 ○^{英文}單語獨案内 洋本全壹冊 ○^{イルスン氏}第一リードル獨稽古全壹冊
 ●^{英人}第二リードル獨稽古 同全壹冊 ●質屋庫 同一冊
 ○天一坊實記 同全壹冊 ○怪談朧月花下風 同一冊
 ●^{新撰}吉凶禍福獨判斷 洋本全壹冊 ●楓時忠義礎 同一冊
 ○歎討天下茶屋 同全壹冊 ○佐倉義民傳 ^{半紙本全二冊}
 ●歎討高田馬場 ^{半紙本全壹冊} ●護國女大平記 同全二冊
 ○寬政秘錄夢物語 同全壹冊 ○慶安大平記 同全三冊
 ●不時珍客即席庖丁 洋本全壹冊 ●世帶寶驗錄遺言十條 ^{洋本一冊}
 ○六十四品漬物鹽加減 同全壹冊 ○交合條例 同全壹冊

- 交合秘訣 洋本全一冊 ●交合條例 洋本全一冊
 ○スperlリソグ獨稽古 同全一冊 ○雲間月 同全一冊
 ●夢想兵衛胡蝶物語 同全一冊 ●花菱胡蝶の彩色 同全一冊
 ○西洋道中膝栗毛 同全一冊 ○袖珍平家物語 同全二冊
 ●袖珍保元平治物語 同全一冊 ●袖珍浮世風呂 同全一冊
 ○袖珍道中膝栗毛 同全一冊 ○袖珍續道中膝栗毛 同全一冊
 ●巷説二葉松 和本全二冊 ●新編淀の車 和本全二冊
 ○實錄小芝の山風 同全一冊 ○珍説芦邊の鶴 同全一冊
 ●^{春宵閑語}新街夜作の樂 同全一冊 ●心齋橋北詰 駸々堂本店敬白

○皇國有名諸家良藥大販賣所

心齋橋二丁目

弊店へ取次と雖も各定約を遂げ本家同様お賣捌致し候間取次並望の方へ申込可被下候
 鶏卵散忠臣膏 本家森平兵衛

●日本傍聽筆記學會入學券授與所

入學志願ノ方ハ當分下名へ報知アランコナ

大阪心齊橋二丁目足袋商 森平兵衛

同 心齊橋北詰 書房 駿々堂 本店

同 佐野屋橋筋北久寶寺町 速水東湖

御召たび



ばつち股引
そめ手拭

賣處 忠臣膏 本家 森平兵衛

足袋ばつちの効用人の身体直接に寒暑温冷を受けるハ人間第一の不養生でありま
はとい衛生家も毎度おとなしありまは朝日新聞投書にも洋服を改正せんより足袋はつ
ちを用ひよ云々とあり豫防せんをあるべからざる要品なり丹平の足袋効用我丹
平足袋の専ら各農商工家に古く用ひ來るの至極お爲方よた無比の品にて幾度水に入ら
るゝとも破るゝやうぢ安さびあらざるハ存じの方又聞てください 坐敷足袋の
効用さしたたびの専ら諸官省諸會社諸新聞各銀行歌舞妓を始め神官僧侶ハ云も更な
り藝娼妓町方に至るまでお坐敷人あるのこれのせれ又用ふる地うそのされいか格好の
よき品として我先祖森玄六氏自ら能狂言に用ひ經驗せらるる無比の品にて是又お求
めのうちへその宜しさを評し玉へ

官許 鶏卵散

さんびやうせう
かちの妙藥

主治 さん病又五種氣癰○石癰○血癰○膿

癰○勞癰○又婦人せうかしどもみみ素ハひえまつの結つの滯りより發する所
あして他藥にて一旦治すといへども病根をたゞさればまゝも再發するの患あり予家
に製ス鶏卵散ハそつばとばんとををしれたるとうけあいます良藥なればくわしきハ
能書を見てあらんと死ねらんことを

官許 忠臣膏

大石良雄氏遺方
きびぐすり

この膏藥ハ忠臣藏七つ目茶屋場のせりふと赤か
うやくもいらぬとしばいを見るその赤かうやく
を今改めて忠臣膏と號くやましきハ本能書又記と 大阪心齊橋筋二丁目 丹平

●英學自宅獨習會誌 毎月二回發兌

定約改正内地雜居ノ舉ハデニ迫マリタル今日ニ於テ英語ノ必要ナルハ固ニ吾輩ノ喋
々ナ待タズ然リト雖モ英語ノ學タル至難ノ業ニ英國人ト雖モ語學家ニ非ラザルモ
リハ專ラ通曉シ得ベカラスモノトス我英學自宅獨習會々長清水桃谷翁曾テ文部英語
學校御雇教師英人テイボア及ビイートン氏ノ依囑ヲ受其ノ子女達ニ英音法英文組織
法等ヲ教授セシ事アリ夫ノ英邦人スラ尙ホ斯ノ如シ況ンヤ本邦人ニ對シ我仮名ヲ以

テ之ガ教ヲ下サントス復々至難ノ難タルモノ然ルヲ世ノ青年輩當ニ大家先生洋人某
 著或ハ閑云々等ノ標題ニノ感サレ知ラズ識ラズ誤謬ヲ習フ如キアラバ先入師トナ
 ルノ謬ニテ遂ニ改頁スル能ハザルベシ而テ其ノ癖タルニ彼ガ嗤笑ヲ受クルミナ
 ラズ日常交際及ヒ商業上ニ於テ大ヒタル損害ヲ受ルニ至ルベシ我ガ會大ヒニ愛ニ感
 アリ由テ會誌ヲ編輯スルニ先ツ發音法ヲ圖解シ大小ノ仮名異狀ノ文字ヲ以テ英音ヲ
 訓メ又タ箋注ヲ加ヘ意義ノ分明ヲ要シ及ヒ會誌讀習者ノ質問ニ應ジ傍ヲ正則英學ノ
 校ヲ設置セリ有志諸君ハ左ノ本支會及取扱所ニ郵券二錢ヲ投ゼハ規則書ヲ呈スベシ

大坂心齋橋大寶寺町東へ入
 卅五番地
英學自宅獨習會本會

西京區第五組小川寺ノ
 同 **西京支會**

內下ル射場町十四番地
 同 **泉州支會**

泉州堺區大道筋大小路
 東へ入ル
 同 **河內取扱所**

河內國丹北郡三宅町
 同 **大和取扱所**

大和國郡山堺町
 同 **活版印刷局**

大坂東區平野二丁目拾壹番地
 自由堂 英學自宅獨習會誌